

で割愛せざるを得ない。是非とも本書で、世界の多様なケアの方略を玩味していただきたい。

第10章の編者でもある藤原久仁子「巡る一岡山県井原市「嫁いらず観音院」に託する高齢者の想い」は、「はじめに」「第1節 現代社会と「ぼっくり」信仰」「第2節 「嫁」はだれか」「第3節 下着の祈祷」「第4節 考察」「おわりに」からなり、現代日本にも根強く残る「ぼっくり信仰」の生態をみながら、高齢者がケアを受けることへの複雑な思いと自立したウェルビーイングへの願いの実相に迫っている。

そして、再び鈴木の本第11章「渡る一世界や宇宙と響き合う物語へ」は、カナダを舞台とした高齢者の住空間とそこでの文化的交流の姿からノーマライゼーションとウェルビーイングの実体化としてのライフケア・コミュニティのあり方を

すべての人々を養うマクロコスモスとしてとらえている。

本書の各章を貫く基本的な理念はウェルビーイングとその実体化としての「養生」である。すべての論考に歴史的観点かむき出しになっているわけではないが、高齢者のケアという視座から人間が生まれ、生き、そして死に旅立つ全過程のそれぞれの場面に、歴史を背負って、それを乗り越える生き方を、楽しみながら求めていく、それこそが「養生」であることを雄弁に説いている論集といえよう。

(瀧澤 利行)

〔御茶の水書房、〒113-0033 東京都文京区本郷
5-30-20, TEL. 03 (5684) 0751, 2010年10月,
A5判, 188頁, 2,400円+税〕

小田泰子 著

『スペイン風邪流行とその時代 ——東北地方と第二師団での流行を中心に——』

インフルエンザの流行に対して、抗ウイルス薬や予防接種以外の介入、すなわち、検疫、隔離、学校閉鎖、集会の禁止などの公衆衛生的介入が近年重視されている。特に、1918-20年パンデミック（いわゆる“スペインかぜ”）に際して米国でこれらの方策が有効だったことが示されており、われわれにとって貴重な教訓となっている。

本書は、表題のとおり“スペインかぜ”流行とその時代背景について、当時の新聞雑誌記事160件以上の内容を羅列的に紹介し、2009年の“新型インフルエンザ”の流行と引き比べて解説を試みたものであり、その意図は時宜に適ったものといえよう。構成は、第一章と第二章が大正時代と第一次世界大戦に関する概説、第三章から第六章が「我が国におけるスペイン風邪流行」の記述、第七章はスペイン風邪で死亡した著名人、最後の第八章がスペイン風邪ウイルスの探索の歴史、である。紹介されている記事の大半は河北新報のもの

で、140件以上ある。他には、読売新聞、東京日日新聞、東京朝日新聞、時事夕刊、時事新報、大阪毎日といった新聞と東京医事新誌などの記事が記述されている。記事の内容は、軍隊での流行、学校での流行や休校の様子、東北帝大教授の談話など、多岐にわたっている。

特に、学校における休校の記事が多いことが興味深い。当時の内務省衛生局の報告書である「流行性感冒」では、岩手県、宮城県とも数校あるいは20数校が休校した事実を簡単に記載している程度であり、本書に記述されている河北新報の記事からは、実際には休校はもっと大規模であったことが知られる。

その他にも、本書には各記事における各地区、学校、軍隊などのその時々の罹患者、死亡者が詳細に記述されている。これらの情報は、行政側では失われているものが多いと考えられるので、実際に新聞にあたって調査する際の導入という意味

で、本書の意義は大きい。

また、流行の経路について、鉄道を通じて駅のある地区で流行が起き、鉄道のない地域でも交通が盛んな地区から流行が始まった、との記事を紹介していることなども興味深い。

しかしながら、残念なことに本書にはいくつか問題がある。まず、本文の記述と新聞雑誌記事の引用とが区別されずに混然と記述されていること、が挙げられる。このために、本書の記述が、当時の記事のなかで述べられていることなのか、著者自身の見解であるのか判然としない。たとえば、新聞記事と思われる記述のなかに罹患数と患者数がある場合に、罹患率や死亡率も記載されていることが多いが、おそらく多くは著者が計算したものである（あとがきに「罹患率と死亡率を計算すると」（178頁）とある）。また、表の多くも新聞記事中の記述をもとに著者が作成したものである。しかしさらに問題となるのは、その引用や数字の取り扱いに誤りが多いことである。評者が上述の内務省衛生局「流行性感冒」（復刻版 平凡社東洋文庫）によって確認できただけでも、いくつかの取り違えや計算の誤りがある。たとえば、「内務省衛生局の統計では、大正8年12月、1か月間の患者数は179,568人で罹患率0.009%である」（131頁）とあるが、該当の表をみると、その患者数は「初発以来大正八年十二月末」のものであり、数も“179,565”である。「罹患率0.009%」も、「人口千に対する患者及死者」欄の「死者」の数字“0.09”を「患者」と取り違えた上で人口百人あたりに直したものである。

加えて、疫学的記述にも問題がある。たとえば、1918年8月以降に突如悪性化した“スペインかぜ”第二波の流行について、本書では、「8月22日、

フランスの港湾都市ブレストの病院をアメリカ兵が次々と訪れ」、「このインフルエンザが兵士とともに」ブレストからアメリカのボストン、シエラレオネの首都フリータウンに「着いたのは、それから数日後のことだった。」（以上40頁）と述べ、ブレストからそれぞれボストンとフリータウンにいたる感染経路を当該頁と表紙カバーに図で示している。しかし、この記述（図）は、典拠となったと思われるゲッツ（「インフルエンザ感染爆発」金の星社）の記述ともども、速断に過ぎられると思われる。この分野の古典である（著者自身も文献として挙げている）クロスビー著「史上最悪のインフルエンザ 忘れられたパンデミック」（みすず書房）によれば、感染した水兵を乗せた軍艦がフリータウンにきたのは8月15日、ブレストではなくイギリスから南下してきたものであり、そのインフルエンザは明らかにマイルドであった。また、ボストンで最初の患者が現れたのは8月27日、埠頭に横づけされていた宿泊用の船舶内であった。すなわち、著者が記述したような感染経路を裏付ける事実は明らかには確認されていないのであり、いかにブレストからの経路が疑わしくとも、現在の知見からは、「3か所同時感染爆発」（クロスビー）というにとどめるべきであろう。

さらに残念なことに、本書にはインフルエンザに関する記述以外にも間違いが散見される。たとえば、脚気が「日本にしか存在しない病気であった。」（73頁）という記述は明らかに誤りである。

上で述べたように本書が貴重な労作であるがゆえに、その瑕瑾が惜まれる。

（逢見 憲一）

[2011年1月、A5判、211頁、自費出版]